

# 「縁・えにし」のよろこび

## ～報恩講法要（2017年11月14～16日）～

ご講師に松月博宣師（糸島市・海徳寺）をお迎えし、浄土真宗で大切にされている法要、報恩講法要をお勤めしました。

16日には、仏教婦人会役員の方々がお齋をご準備してくださり、お齋を囲んでの賑やかな時間を過ごしました。



## ～永代経法要（4月17～19日）～

ご講師に福間義朝師（広島・教専寺）をお迎えし、「南無阿弥陀仏」の御教えが永きに亘って伝わる願いの中にお勤めしました。

福間先生は、住職が尊敬している布教使の先生です。阿弥陀さまのお慈悲をお一人お一人の心に届くお取り次ぎをしてくださいました。



## 2018・2017年度仏教婦人会総会・春の法座と初参式（4月7日）

先般、仏教婦人会の総会（2年毎）を開催しました。役員交代（任期2年）ということで、新旧役員とともに多くのご参加でした。

総会において、これまでの婦人会の良き伝統を継続し、時代に即した活動を模索しながらご縁をつなぐ思いを確認しました。

ご法話は、女性布教使の水之江陽子師（大分・法林寺）をお迎えしました。ご自身のご経験を通して、お念仏との出遇いを慶ばれた尊いお取り次ぎでした。



新各地区代表者のみなさま



会長：後藤育子さん(中央)  
副会長：後藤みよ子さん(左) 会計：後藤文子さん(右)



## ☆第6回 初参式☆

眞砂乃悠（まさごゆきひさ）くんが受式しました。ご家族に見守られながら、いのちの誕生といのちのつながりを慶ぶ尊き仏縁でした。



## 阿弥陀さまからのお手紙

『そのままに ありがとう』

いてくれるだけでいい

水之江陽子（大分県日田市 法林寺）

「悪性腫瘍です」医師は静かに言った。数日前の検診で、少しは覚悟していたが、同席してくれた夫が「本当に乳がんですか」と何度も尋ねる声に私は、ぼんやり聞いていた。私の住む大分県日田市は、水郷と呼ばれ朝霧のたちこめる静かな盆地である。私は、深い霧の中で、いきなり、行き先の見えないジェットコースターに乗せられた気分になった。

「お母さん、悪いところは全部取ってもらいなよ」当時、中学2年生だった息子が、私の背中を押してくれた。結婚して19年。出産以外では入院したことない、元氣だけが取り柄の母親だったので、家族は、私以上に辛かったと思う。手術が終わり、抗がん剤の点滴治療が始まると、さまざまな副作用が襲ってきた。寝返りをうつことも難しくなった。脱毛は、私にとって痛くも痒くもないが、日に日に変貌する母親を見ることは、当時小学4年生の娘にとって、とても苦しいことだったと思う。

何一つ、親らしいことができず、情けない思いでいた時、娘がつぶやいた。「いいとばい。お母さん。そのままがいい。おってくれるだけでいいと。」10歳の娘の目には涙があふれていた。

仏教の基本に照らして、仏教では「諸行無常」、「諸法無我」、「一切皆苦」、「涅槃寂静」と教えて

くれる。これは四法印といい、仏教の基本である。「諸行無常」（すべては移り変わる）…山は削られて道になり川は形を変えていく。幼い頃見た風景は一変した。形ある物はいつか崩れ、生まれた人は必ず死んでゆく。思いがけないことは誰にでも起こる。まちがいない、この私にも。

「諸法無我」（不変な存在などない）…すべてのものに確かなものなど何もない。私の思い通りには決してならない。今まで、子どもが思い通りにならない、と悩んでいたけれど、私の体が、私の思い通りにはならないのだと、知らされた。

「一切皆苦」（すべては苦）…苦しい。人が私に、励まし慰めの言葉をかけてくださる。「無理しないで」「若いから大丈夫よ」「頑張って」その一つ一つが私の心につきささる。「無理なんかしていない。若いのがよくないのだ。どうして大丈夫などと言えるのか。これ以上、何を頑張ればいいのかだろう」。私は心は、自分でも悲しくらい、とげとげしくなり、そのことが、ますます私を苦しめる。皆が、良かれと思つて気遣つてくださる言動に、私の心は悲鳴をあげた。苦しみは、間違いない、私が、自分自身で作りだして行く。

「涅槃寂静」（煩惱の炎が消えたさとり）…そんな、愚かで浅はかな私に、「そのままがいい」と換んでくださるのが阿弥陀さま。何もできない私を見抜いて、必ず救う、『南無阿弥陀仏』とはたらいてくださっている、それは、まちがいない真実。

## 心の霧にさす一すじの光

『生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかな

らずわたしける』

（親鸞聖人）

私は、行き先の見えないジェットコースターに乗っていたのではなかった。まちがいのない願船に乗せていただいているのだ。「そのままがいい」と泣いてくれた娘の言葉は、私の心の霧にさす、一すじの光のようだった。

あれから2年。病気になって良かった、とは言えないけれど、病気のおかげで気づかされることは多く、病気にならなければ知り得なかった縁も、たくさんいただいている。何よりも、子どもたちを「いつてらっしゃい」と見送れる日々が素直に嬉しい。

「おかあさんは死んでも、しづといわよ。だって、南無阿弥陀仏だもん」と言うと、「訳わからん」と笑ってくれる家族に、ありがとう。「少し寒くなったよ。大丈夫？」と心配してくれる友に、ありがとう。「たくさん食べて元気にしとってね」と新鮮な野菜や果物を届けてくださるご門徒の方々に、ありがとう。

私は今日、生きている。

私の喜びを喜び、私の悲しみを悲しむという、大悲大慈の阿弥陀さまに、生かされている、いのち。そのままに、ありがとう。

※この法話を書かれた水之江先生は、春の仏教婦人会法座のご講師でした

